近衛前久（龍山）詠『五十首和歌』関連資料　解題と翻刻（上）

大谷俊太

陽明文庫所蔵一般文書中の、近衛家十六代当主、近衛前久（さきひさ）（天文五1536～慶長一七1612、享年七十七、法号、龍山）が慶長十二1607年の夏に詠じた『五十首和歌』に関わる詠草類を紹介する。

陽明文庫には、慶長以降の近衛家歴代の自筆資料を含め、その周辺で書写された一次資料が豊富に伝存するが、当該「五十首和歌」についても、直接の関連資料が十数点伝わる。

そのうち、まとまった内容と分量を持つものは以下の八点である。

A「龍山公五十首御詠草」（一般文書目録番号59127、以下同じ）

・折紙三紙。仮綴。写本。前久自筆。貼紙による推敲多し。59126～59129の包紙一紙、上書「四五ク丶リ紙数十六枚」。

B「後陽成院宸筆御消息」（32962、『宸翰英華』五六九所収）

・折紙一紙。後陽成天皇宸筆。縦29・4糎×横47・2糎。32962～32964の包紙一紙、包紙上書「後陽成院勅書

三枚」（前久筆）。

C 「前久公御詠草」（第一丁～第三丁、59177）

・袋綴、仮綴。半紙本。写本。一冊。全十七丁、うち二丁白紙。前久自筆。縦25・2×横19・9糎。外題「龍山」。

D 「後陽成院宸筆御消息」（32963・32964、『宸翰英華』五七〇所収）

・折紙二紙。後陽成天皇宸筆。縦32・1糎×横46・2糎。

E 「前久公御詠草」（第四丁以降、59177）

・Cに同じ。

F 「和歌」（76059）

・袋綴、仮綴。半紙本。写本。一冊。前久自筆。全十六丁。縦26・4×横19・4。

G 「龍山公五十首御詠草」（59126）

・折紙三紙。仮綴。写本。前久自筆。縦18・5糎×横54・8糎。

H 「五十首」（77705）

・袋綴、仮綴。半紙本。写本。一冊。前久自筆。全十六丁。遊紙なし。縦27・8糎×横20・2糎。

五十首和歌全体の本文が記されている詠草が三点（A・G・H）、前久の詠草に対する後陽成天皇の質問状が二点（B・D）、それに対する前久の回答が二点（C・E）、以上のやりとりを前久がまとめたものが一点（F）である。

このうち、BとDは既に『宸翰英華』に紹介されており、左のような解題が付される。

五六九　宸筆御消息　一通　東京都　陽明文庫

御宛はないけれども、伝来より見て近衛信尹に賜はったことは明かで、この外にも類似のものが多数現存してゐる。

これは早春以下十三首の和歌について御意見を述べられたもので、折紙に書かれてゐる。此の題は、第四八七号御続懐紙の五十首の中に見られる。猶「嶋霞」の項にある三光院は三条西実枝、恵雲院は信尹の祖父近衛稙家である。「霞吹とく」「くづれ」「玉水」等の語句については次の御消息に於て更に詳細に仰せられてゐる。

五七〇　宸筆御消息　一通　東京都　陽明文庫

前掲御消息の後重ねて近衛信尹に「霞吹とく」以下九目に亘って御疑難を遊ばされた御消息で、折紙に書かれてゐる。此の中に天皇が細川幽斎に密々御詠を批評せしめられた事や、称名院三条西公条の如き先輩にも誤あることを指摘された事や、信尹の誤謬を度々の楚忽と御笑ひあるなど、興味深きものがある。因に女御とあるのは中和門院の御事で、信尹の妹に当る。

五六九の解題にある「四八七号御継懐紙」とは、同書解題に、

四八七　後陽成天皇宸筆御懐紙　一巻　高松宮御蔵

詠五十首倭謌

早春

春のくる比也けりな昨日今日雲の立まふ山もかすみて

（下略）

此の五十首の御製は京都の大谷派本願寺にも亦一本を伝へ、此の御本と寸分の相違もないやうに拝せられる。又夙く世にも流布してゐる。御製の年紀は明かでないが、これも黄葉和歌集に、題の符号する夏日同詠五十首和謌が有り、亦、参議右大辨と署してゐるから、慶長十一年から十三年までの夏の御懐紙であらう。

とあるもので、国立歴史民俗博物館『高松宮家伝来禁裏本目録』の「後陽成院五十首」（宸筆原本、一軸、1638）に当

たる。猶、右の「京都の大谷派本願寺」所蔵本は、京都嵯峨鳥居本の本願寺現蔵（平成二十六年四月、本願寺春の宝物展「本願寺に伝わる御宸翰―天皇の墨跡―」に出陳）で、近衛家伝来のものとのこと（川崎佐知子氏御示教）。猶々、Hの「五十首」には、この後陽成天皇の五十首と当該前久の五十首とが前久自身により合写されている。

この五十首和歌については、上記五六九解題において、『黄葉和歌集』所載の烏丸光広の同題五十首（215～264）に「夏日同詠五十首和歌　参議右大辨藤原光広」と「参議右大辨」の署名があるところから、慶長十一年から十三年までの夏の作と推定されたが、その後、日下幸男氏により、他の同題の五十首和歌の報告があり、現在以下の詠者が知られる。

○中院通村　宮内庁書陵部蔵「後十輪院内府五十首」501／430「夏日同詠五十首和歌　侍従源通村」

○中院通勝（素然）　京都大学附属図書館蔵中院文庫『五十首和歌』（中院6／194）「詠五十首和歌　沙弥素然」

他の伝本に青山会文庫『仙洞御着到百首』がある。但、巻軸題が「寄世祝」ではなく「寄世祝言」となる。高梨素子氏は「素然のものは最終題を「寄世祝言」とし、内題は「詠五十首和歌」とのみあるので詠進歌ではあるまい」（古典文庫『中院通村家集』解題、2000）とされ、日下氏は、内題については僧侶の場合の書式に叶うとされる。

○三条西実条　早稲田大学附属図書館蔵三条西家本『夏日同詠五十首和歌』（35）自筆。「権中納言藤原実条」

○阿野実顕　吉田幸一氏旧蔵『実顕五十首和歌』「夏日同詠五十首和歌　左近衛権中将藤原実顕」（『長嘯子全集』五に翻刻所収、『弘文荘待賈古書目』四三、『思文閣古書資料目録』善本特集二二掲載）

○西洞院時慶　京都大学附属図書館蔵平松文庫『時慶卿五十首倭歌』「夏日同詠五十首和歌　参議平時慶」

詠作年次については、西洞院時慶の五十首の奥に「慶長十二卯廿五日ニ上」とあることから、慶長十二1607年四月二十五日頃の詠進であると判明している。（日下幸男『中院通勝歌集歌論』私家版、1993、のち『中院通勝の研究』勉

誠出版、2013所収）

さて、『宸翰英華』解題では、B・Dの書状の宛先を近衛信尹とする。また、一九九二年に京都国立博物館で開催された「かなの美」展に、五七〇の二紙のうち、第一紙のみが出陳されたが、図録解説でも、「近衛信尹に送った消息」とあり、「壮年期の天皇の熟達した筆跡を示す消息」とされている。近時、日下幸男氏は、Hの『五十首』についても同題五十首であるとの紹介を加えられたが（「解題」「中院通勝について」、『中院通勝の研究』勉誠出版、2013）、B・Dの後陽成天皇書状との関連については触れず、「天皇の信尹への和歌指導が、非常に懇切丁寧なものであったことがうかがわれる」と言われ（「中院通勝年譜稿」、『中院通勝の研究』所収）、『宸翰英華』の説が踏襲されている。しかし、今回紹介する資料に拠り、その内容が前久の「五十首和歌」についての記事であることが確認できるので、宛先は近衛前久が正しい。

そして、F『和歌』の冒頭近くに、「五十首の御詠をあそばし（拝覧させられ）、おなじくよみたてまつれと被仰下にありしにより、とりあへず（瓦礫）高覧にそなへ侍りけり」とある（本稿（下）に所収）ので、後陽成天皇の五十首が詠まれて後、それ程時を隔てず当該前久の「五十首和歌」も詠まれたものと言える。すなわち、慶長十二年四月二十五日頃の詠作であり、時に、前久七十二歳、後陽成天皇は三十七歳である。

以下、関連資料を翻刻する。

先ず、五十首和歌全体の本文が記されている詠草三点（A・G・H）を、その成立順に上段から下段へ三段組で、推敲の過程がわかるように、対照させて翻字する。猶、Aのうち十首には貼紙による推敲がなされているが、貼紙の下の文字を五十首和歌の後にまとめて翻字する。【翻刻Ⅰ】

次いで、後陽成天皇と前久との間で問答が交わされた和歌は、五十首のうち、1春霞・2氷解・3嶋霞・4河辺梅・8遊絲・10樵路躑躅・15夏草・18萩半綻・23月下遊士・28落葉驚夢・32市歳暮・41寄名所湊恋・44石清水の十三首であるが、その十三首の各歌ごとに、A～Hの関連部分を抜き出しまとめ掲げる形で翻字する。【翻刻Ⅱ】

さらに、E「前久公御詠草」の十三丁～十六丁に記される「題をまはす様」「本歌取様之事」、A～H以外の和歌の覚書等の関連資料九点（「前久公筆書状等」39024・39032・39035・39044・39050・39064・39086・39090・39100）を翻字する。【翻刻Ⅲ】

最後に、F『和歌』の冒頭部の序に当たる文章、D「後陽成院宸筆御消息」の最後の一項目を翻字する。【翻刻Ⅳ】

猶、【翻刻Ⅱ】の「15夏草」以下、【翻刻Ⅲ】・【翻刻Ⅳ】の記事は（下）に収載する。

〔凡例〕

一、翻字は原則として原本表記の通りとする。
一、旧字体・異体字・合字は通行の字体に改めた。
一、句読点・並列点を施し、清濁を分かった。
一、挿入語句は本文に組み込み、見せ消ちの文字は網掛けで示した。
一、C・Eの朱筆部分は楷書体で示した。
一、虫損・貼紙等による判読不能箇所は□で示した。
一、その他、私の注記事項は（　）で示した。

【翻刻Ⅰ】

A 59127「龍山公五十首御詠草」

五十首

龍山

春十

早春

①〳〵空はまだ霞もあへず春さえて（まきあぐるすだれに春の風）
こぞのまゝなる嶺の白雪

氷解

②日影さす（岩たゝむみぎりのいけのあさひかげ）砌の池の岩間より
とくや氷をくだく玉水（ところ〴〵やこほりとくらん）

嶋霞

③奥津風霞吹〳〵とく（をはらふ）波の上に
うかび出たるあはぢ嶋山

河邊梅

④川風の岸うつなみのくづれにも（二あひのあやをる水とみつる哉）

G 59126「龍山公五十首御詠草」

五十首

龍山

春十

早春

捲あぐる簾に春の風さえて
こぞのまゝなる嶺の白雪

氷解

岩たゝむ砌の池の朝日影
ところ〴〵や氷とくらむ

嶋霞

奥津かぜ霞をはらふ波間より
うかび出たるあはぢ嶋山

河邊梅

二あひのあやをる水とみゆる（つ）哉

H 77705「五十首」

（前久詠部分のみ翻字）

五十首

龍山

春十

早春

捲あぐる簾に春の風さえて
こぞのまゝなる嶺の白雪

氷解

岩たゝむみぎりの池のあさ日かげ
ところ〴〵や氷とくらん

嶋霞

奥津かぜかすみをはらふ浪間より
うかび出たるあはぢしま山

河邊梅

二あひのあやをる水とみつるかな

ねざしはなれず匂ふ梅が枝（たち枝の梅のうつる川ぎし）

春夜

⑤さゝ枕ふしもあへぬに春の夜は
野守のかねの明がたのこゑ

裁花

⑥名にしほふ志賀の都はさもあらばあれ
うへし四町の木々の花ぞの

花埋路

⑦はつせ寺雪かとみえてさけばちる（みえてちりそふる）
花こそうづめ春の山道

遊絲

⑧風絶て霞のひまに幽にも（はれわたる雲もみどりのなかぞらに　のどけく）
軒端をちかみいとあそぶみゆ（それかとばかりみゆるいとゆふ）

雲雀

⑨人帰るしばふが道の夕ひばり
とこはなれつゝ空になく也

樵路躑躅

⑩春もはやくれなゐふかき岩つゝじ（こゝろなき木こりをみねの）

たち枝の梅の○うつる川岸（下枝をひたす）

春夜

さゝ枕ふしもあへぬに春のよの
みじかき夢はむすぶともなし

裁花

名にしほふ志賀の都はさもあらばあれ
うゑし四町の木々のはなぞの

花埋路

はつせ寺雪かとみえて散そふる（にまがひ）
花こそうづめ春の山みち

遊絲

はれわたる雲もみどりの半天に（とみえつゝなびく）
それかとばかりみゆるいとゆふ

雲雀

人帰るしばふが道の夕ひばり
とこはなれつゝ空になく也

樵路躑躅

心なき木こりをみねの岩つゝじ

梅の下枝をひたす川岸

春夜

さゝ枕ふしもあへぬにはるのよの
みじかき夢はむすぶとも（ま）なし

裁花

名にしほふ志賀の都はさもあらばあれ
うへし四町の木々のはなぞの

花埋路

はつせ寺ゆきにまがひて散そふる
花こそうづめ春の山みち

遊絲

はれわたる雲もみどりのなかぞらに
それとみえつゝなびくいとゆふ

雲雀

人かへるしばふがみちの夕ひばり
とこはなれつゝ空になく也

樵路躑躅

心なき木こりをみねの岩つゝじ

木(てごとにかりて)こりの袖のかへる山みち

夏六

竹亭夏来

⑪風の音もいつしかなつのは山まで
おなじみどりの竹の下庵

礒郭公

⑫明がたのとまやの月におちかへれ
◦磯辺のなみの山ほとゝぎす

沢菖蒲

⑬雨にひく袖は野沢のあやめぐさ
あやめもさらにわかぬ(わかずふかき)水底

幽栖五月雨

⑭すむ庵はあたりはなれて山ぎは(ゆふは山)に
露のみ袖もさみだれの比

夏草

⑮色々に春みし花もをちこちの
ひとつにしげる野べの夏草

手ごとにかりてかへる(はこぶ)山道

夏六

竹亭夏来

風の音もいつしかなつのは山まで
おなしみどりの竹の下庵

礒郭公

明がたのとまやの月に落かへれ
波の磯辺の山ほとゝきす

沢菖蒲

雨にひく袖は野沢のあやめ草
あやめもわかずふかき水底

幽栖五月雨

すむ庵はあたりはなれてゆふは山
露のみ袖もさみだれの比

夏草

わかなへに里のさかひもわかぬまで
ひとつに茂る(おなじみどりの)野辺の夏草
(ひとつ色なる)

手ごとにかりてはこぶ山道

夏六

竹亭夏来

風の音もいつしかなつのは山まで
おなじみどりの竹の下庵

礒郭公

明がたのとまやの月に落かへれ
波の磯辺の山ほとゝぎす

沢菖蒲

雨にひく袖は野沢のあやめぐさ
あやめもわかずふかき水底

幽栖五月雨

すむ庵はあたりはなれてゆふは山
露のみ袖もさみだれのころ

夏草

わかなへに里のさかひもわかぬまで
ひとつ色なる野辺の夏草

樹蝉

⑯深山木のしげりあひたる柴の戸に（軒ばより）
瀧つ瀬のごとせみやなくらん（こゑ）

秋十

簷下荻

⑰秋風の音を夜とこにしきたへの
枕めさます軒のした荻

萩半綻

⑱秋萩のまがきをこえておなじ枝に（ふきとをるきりのまがきの秋風に）
まだき色ある花もこそさけ（はぎのにしきぞなかば色めく）

初雁成字

⑲雲にたがかきつらねたるかず〳〵の（玉札）
文字ぞとみればはつかりのこゑ

旅泊鹿

⑳とまり舟入江のなみに遠山の（山ヘイヅクトシラナミキ）
鹿の音よする浦風ぞ吹（そよとも）

樹蝉

深山木のしげりあひたる軒端より
たきつせのごとせみのなくこゑ（もろ）

秋十

簷下荻

秋風の音を夜とこにしきたへの
枕目さます軒のした荻

萩半綻

ふきとをるきりのまがきの秋風に
はぎのにしきぞなかば色めく（の）

初雁成字

雲にたがかきつらねたる玉札の
文字ぞとみればはつかりのこゑ

旅泊鹿

鹿のねもよりくるなみの泊舟
霧のいづくの秋の山風

樹蝉

深山木のしげりあひたるのきばより
たきつせのごとせみのもろこゑ

秋十

簷下荻

秋風の音を夜ことにしきたへの（床）
枕目さます軒のした荻

萩半綻

ふきとをるきりのまがきの秋かぜに
はぎのにしきのなかば色めく

初雁成字

雲にたがかきつらねたる玉札の
文字ぞとみればはつかりのこゑ

旅泊鹿

鹿のねもよりくるなみのとまりぶね
霧のいづくの秋の山風

＼鹿のねもよりくるなみの泊舟霧のいづくの秋の山風

秋夕

㉑あはれさはいづれなるらん月はあき
秋はゆふべとながめわびつゝ

月前鐘

㉒すみのぼる月にさやけき鐘のこゑも
猶いやたかしかづらきの寺

月下遊士

㉓うたふ（ひつゝ）こゑ月の夜すがらたをやおの（はれ）
舞のあふぎはをくひまぞなき

＼よとゝもにくめる情にたはれおの月のふくるもおもほえぬ袖

故郷擣衣

㉔いかにしてうちもかさねんあさ（さよ）衣
涙も露もふる郷の秋

蔦閉戸

㉕つたかづらはひまつはりて柴の戸を
とぢかためつゝとふ人もなし

秋不留

秋夕

あはれさはいづれなるらん月はあき
秋はゆふべとなかめわびつゝ

月前鐘

すみのぼる月にさやけき鐘のこゑも
猶いやたかしかづらきの寺

月下遊士

よとゝもに情をくみてあそびをの（うたひつゝ）月の夜すがらたはれおの
舞のあふぎはをくひまぞなき（月のふくるもおもほえぬ袖）

故郷擣衣

いかにしてうちもかさねんさよ衣
涙も露もふる郷の秋

蔦閉戸

つたかづらはひまつはりて柴の戸を
とぢかためつゝとふ人もなし

秋不留

秋夕

あはれさはいづれなるらん月はあき
秋はゆふべとながめわびつゝ

月前鐘

すみのぼる月にさやけき鐘のこゑも
猶いやたかしかづらきのてら

月下遊士

よとゝもに情をくみてあそびをの
月のふくるもおもほえぬ袖

故郷擣衣

いかにしてうちもかさねんさよごろも
涙もつゆもふるさとのあき

蔦閉戸

つたかづらはひまつはりて柴の戸を
とぢかためつゝとふ人もなし

秋不留

㉖おしめどもとまらぬ秋やあさぢ原
露は霜にやをきかはるらん

冬六

山館冬至

㉗山ざとは風こそことにはげしけれ
冬たつけふのしるべみせつゝ

落葉驚夢

㉘山風のねやの板間に音そひて
夢おどろかす木の葉ちるなり

田氷

㉙かり残す水の深田のをしねにぞ
いくへ氷のとぢかさぬらむ

渕水鳥

㉚あさき瀬はうきねをかへしとやかた渕に
あまたあつまるをし鴨のこゑ

洛初雪

㉛みやこにはけさはつ雪をみよしのゝ
山は日ごとやふりつもるらん

おしめどもとまらぬ秋のあさぢ原
露は霜にやをきかはるらん

冬六

山館冬至

山ざとは風こそことにはげしけれ
冬めく雲のしるべみせつゝ

落葉驚夢

山風のねやの板間に音そひて
夢おどろかす木の葉ちるなり

田氷

かり残す水の深田のをしねもや
いくへ氷のとぢかさぬらむ

渕水鳥

あさき瀬はうきねをかへしとやかた渕に
あまたあつまるをし鴨のこゑ

洛初雪

みやこにはけさはつ雪をみよしのゝ
山は日ごとやふりつもるらん

おしめどもとまらぬ秋のあさぢ原
露は霜にやをきかはるらん

冬六

山館冬至

山ざとは風こそことにはげしけれ
冬めく雲のしるべみせつゝ

落葉驚夢

山風のねやの板間に音そひて
夢おどろかす木葉ちるなり

田氷

かり残す水の深田のをしねもや
いくへ氷のしたにとぢらん

渕水鳥

あさき瀬はうきねをかへしとやかた渕に
羽ふきあつまる水鳥のこゑ

洛初雪

みやこにはけさはつゆきをみよしのゝ
山は日ごとやふりつもるらん

市歳暮

㉜○としもはやけふをかぎりと暮ふかく（家〳〵に）
はらひかねたる袖の市柴（つかねをき）
＼としなみのよりくるするゑはすみの江やあさいち人の袖つどふらん

恋十

寄名所山恋

㉝ことひよはり色に出にけり忍ぶやま（あだ人は）（あさはかに）（こそもあれ）
忍ぶるかひもあらじとぞ思ふ（のなにかあるらん）
＼忍ぶるかひもなき袖の露（あらぬたもとは）

寄名所岡恋

㉞おもふ色もよそにやみえん水くきの
岡の梢ももみぢしにけり

〻〻〻〻浦〻

㉟あふことはかた田の浦による波の
あだしちぎりもおもひ絶めや

〻〻〻〻滝〻

㊱わが袖におつる涙は音なしの

市歳暮

としなみのよりくるするゑはすみの江や
あさいち人の袖つどふらん

恋十

寄名所山恋

あだにしも色にいでにけり忍ぶ山
しのぶるかひもなき袖の露

寄名所岡恋

思ふ色もよそにやみえむ水くきの
岡の梢ももみぢしにけり

〻〻〻〻浦〻

あふことはかた田の浦による波の
あだしちぎりもおもひ絶めや

〻〻〻〻滝〻

わが袖におつる涙はをとなしの

市歳暮

としなみのよりくるするゑはすみの江や
あさいち人の袖つどふらん

恋十

寄名所山恋

あだにしも色にいでにけりしのぶやま
しのぶるかひもなき袖のつゆ

寄名所岡恋

思ふ色もよそにやみえん水ぐきの
岡の梢ももみぢしにけり

寄名所浦恋

あふことはかた田のうらによるなみの
あだしちぎりもおもひ絶めや

寄名所滝恋

わが袖におつるなみだはをとなしの

たきとや人のさぞなみるらん

〻〻〻〻川〻

㊲もろとにいくたの河のあさからず
おもひしづみし身ぞ哀なる

〻〻〻〻橋〻

㊳契をきてまたるゝ閨の更るよは
さながら胸もとゞろきの橋

〻〻〻〻里〻

㊴うづらとも成てふさばやふか草の
里にわがおもふ人しあるには

〻〻〻〻杜〻

㊵つれなくて月日へにけりいつまでか
あはでのもりの露にぬれまし

〻〻〻〻湊〻

㊶せきあへぬ袖の涙はみなと河（うらみゆへ）
うらみはてこし中となりつゝ（あさはかになる中ぞあやなき）

〻〻〻〻浜〻

㊷風の音もたかしの浜の夕浪の

たきとや人のさぞなみるらん

〻〻〻〻川〻

もろとにいく田の川の浅からず
おもひしづみし身ぞ哀なる（ハあやなしな）

〻〻〻〻橋〻

契をきてまたるゝとこの更る夜は（まちわびてふけわたるよのさむしろに）
さながら胸もとゞろきの橋

〻〻〻〻里〻

うづらとも成てふさばや深草の
里にわがおもふ人をきく（こふ）とて

〻〻〻〻杜〻

つれなくて月日へにけりいつまでか
あはでのもりの露にぬれまし

〻〻〻〻湊〻

うらみゆゝ袖の涙はみなと川（こし　になみこす）
あさはかになる中そあやなき（つゐのよるべもたのみすくなき）

〻〻〻〻浜〻

風の音もたかしの浜の夕波の

たきとや人のさぞなみるらん

寄名所川恋

もろとにいく田の川のあさからず
おもひしづみし身はあやなしな

寄名所橋恋

まちわびてふけわたるよのさむしろに
さながらむねもとゞろきの橋

寄名所里恋

うづらとも成てふさばやふかくさの
里にわがおもふ人をこふとて

寄名所杜恋

つれなくて月日へにけりいつまでか
あはでのもりの露にぬれまし

寄名所湊恋

うらみこし袖になみこすみなと川
つゐのよるべもたのみすくなき

寄名所浜恋

風の音もたかしの浜のゆふなみの

よる〳〵かけて物をこそ思へ

雑八

伊勢

㊸月も日もあまてる神か鈴鹿山
をとにきこえし昔をぞ思ふ

石清水

㊹おとこ山さかゆくかげの石清水
にごらぬ神の心をぞしる

玉津嶋明神

㊺ことのはの道をぞみがく玉津嶋
神のめぐみやたのみきぬらん

山家猿

㊻わが庵は杉たつ山の暮ごとを
ともなひがほのむら猿のこゑ

羇旅

㊼入海にかけをく舟はしほ時を
うつさじとしもつなでをぞとく

寄草述懐

よる〳〵かけて物をこそ思へ

雑八

伊勢

月も日もあまてる神かすゞか山
をとにきこえしむかしをぞ思ふ

石清水

男山さかゆくかげのいはし水
にごらぬ世々のためし成けり

玉津嶋明神

言のはのみちをぞみがく玉津嶋
神のめぐみやたのみきぬらん

山家猿

わが庵は杉たつ山の暮ごとを
ともなひがほのむら猿のこゑ

羇旅

入海にかけをく舩はしほ時を
うつさじとしも縄手をぞとく

寄草述懐

よる〳〵かけて物をこそ思へ

雑八

伊勢

月も日もあまてる神かすゞかやま
むかしにこえて猶あふぐらん

石清水

男山さかゆくかげのいはしみづ
にごらぬ世々のためし成ける

玉津嶋明神

言の葉のみちをぞみがく玉津嶋
神のめぐみやたのみきぬらん

山家猿

わが庵は杉たつ山のくれごとを
ともなひがほのむら猿のこゑ

羇旅

入うみにかけをく舩はしほどきを
うつさじとてやつなでとくらん

寄草述懐

㊽残りてもかひはあらのゝ冬草の　　残りてもかひはあらのゝ冬草も　　のこりてもかひはあらのゝ冬くさも
霜をいたゞく我身ひとしき　　霜をいたゞく我身ひとしき　　霜をいたゞく我身ひとしき

寄夢懐旧　　寄夢懐旧　　寄夢懐旧

㊾めぐるこそたゞ夢の間の月日なれ　　めぐるこそたゞ夢の間の月日なれ　　めぐるこそたゞ夢の間の月日なれ
きえし別をおもひ出れば　　きえし別をおもひ出れば　　きえし別をおもひ出れば

寄世祝　　寄世祝　　寄世祝

㊿おほけなき君がめぐみのなをき世に　　おほけなき君がめぐみのなをき世に　　おほけなき君がめぐみのなをき世に
むまれあふ身ぞいともかしこき　　むまれあふ身ぞいともかしこき　　むまれあふ身ぞいともかしこき

いかやうにも被加（ママ）御詞候様ニ
御申奉頼候。其以後清書可仕候。

（「龍山公五十首御詠草」59127 の貼紙の下の文字）

河辺柳

春風のあやをる水の川ぎしにたち枝のうめのかげぞうつろふ
さく花の白妙の

④川岸の梅のしづえのうつろへば　　色にうつろふくれなゐの梅
風あやをる水にうすくこき
底にしらあはのしづむとぞみる

春夜

さゝ
〳〵草枕いよゝみじかき春の夜はふしもあへぬに
そばだつるまくらとも

みじかき夢ぞむすぶまはなき
〳〵はてぬ〳〵さめてかなしき

⑤草枕むすぶまもなき春のよのみじかき夢のおしきいにしへ

いづちさめけん

樵路躑躅

〳〵春もはやくれなゐそむる岩つゞじ
みねの木こりのかへるこの山

⑩心なきたきゞの袖のかへるさは由もくれなゐの岩つゞじ哉

袖の
袖は木こりのかへる山道

竹亭夏来

おなじみどりの

⑪風の音もいつしか夏のは山までみなよ竹のかげ

下庵

そふる宿

夏草

色々に　みし　も色　をちこちの

⑮みゐるまゝに春さく花のしな〳〵□ひとつ色なる庭の夏草

にしげる野べの

簷下荻

秋風の音を夜床に

⑰夢さそふ風の衍あはしきたへのまくらにかへる軒のした荻

目さます

萩半綻

ひまみえ

⑱真萩はら籬のひまにかつみえてかた枝さきこす花ぞ色なる

きりの籬にかくろひて　や花の色にさくらん　にさきけり

小萩原まがきをこえておなじ枝にまだき色なる花もこそさけ

秋不留

ぬ秋のしるべとや露も霜にやをきかはる□□

おしめども

㉖ゆく秋やとまらざるらんしのべどもあさぢがはらにきゆる露□

落葉驚夢

㉘木のはちるねやの板間に音たてゝ(そひて)夢おどろかす山風ぞふく

田氷

㉙むら鳥(かり)のむれゐる(はらふ)小田(山田)の(はらの)水辺(稲ぐき)にもあさりがたしや氷(水がくれながら)とぢつゝ

【翻刻Ⅱ】

1早春

A「龍山公五十首御詠草」(59127)

早春

空はまだ霞もあへず春さえてこぞのまゝなる嶺の白雪(〳〵まきあぐるすだれに春の風)

B「後陽成天皇宸翰御消息」(『宸翰英華』五六九)

早春

新古今空は猶かすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月　後京極

これを本哥候や。あまり其まゝのやうに覚(おぼえ)候まゝ、けいこのため尋申候。

C「前久公御詠草」(59177)

早春　**空はまだ霞もあへず春さえてこぞのまゝなる嶺のしら雪**

新古今空は猶かすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月　後京極

是を本歌候哉。あまり其まゝのやうにおぼえ候まゝ、けいこのため尋申候。

仰尤存候。上の句等類に可罷成候哉。

まきあぐる簾に春の風さえてこぞのまゝなる嶺のしら雪

如此直申候はゞ、等類には不可成申候歟。

D 「後陽成院宸筆御消息」（32963、『宸翰英華』五七〇）

一　空は猶かすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月

空はまだかすみもあへず風さえて、是は等類とは不申候。吟かよひ候故、其侭のやうに候はん歟との申事にて候。愚詠を隠密にて幽斎に批判させ申候時、愚詠に、

芳野山花さく比の朝な〳〵立こそまされ峯の白雲

と候を、

小倉山しぐるゝ比の朝な〳〵昨日は薄き四方の紅葉々

と候制詞のある名哥に吟かよひ候故、あしく候由申候を、各又尤の由穿鑿候つる。道具詞のかはりたる斗にて、其侭に聞え候。又、

茅葉屋破神代もきかず立田川からくれなゐに水くゝるとは

時雨にはたつたの川も染にけりから紅に木葉くゝれり在原友于

是を、をぢがうたをぬすみ取事遺恨也と秘抄共にみえ候。友于は在原行平息にて、業平ためにはをひにて候。是等も詞の置所もちがひ候へ共、心と吟と同物故にて候歟。

E 「前久公御詠草」（59177）

一　空は猶かすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月

空はまだかすみもあへず風春さえて。是は等類とは不申候。吟★かよひ候故、其侭のやうに候はん歟との申事にて候。愚詠を隠密に幽斎に批判させ申候時、愚詠に、

芳野山花さく比の朝な〳〵立こそまされ嶺のしら雲

峯の白雲と候を、

小倉山しぐるゝ比の朝な〳〵昨日は薄き四方の紅葉々

と候制詞のある名哥に吟かよひ候故、あしく候由申候を、各又尤の由穿鑿候つる。道具詞のかはりたる斗にて其侭に聞え候。又、

茅葉屋破神代もきかず立田川からくれなゐに水くゝるとは

時雨にはたつたの川も染にけりから紅に木葉くゝれり在原友于

是を、をぢうたをぬすみ取事遺恨也と、秘抄共にみえ候。★★友于は在原行平息にて、業平ためにはをひにて候。是等も詞の置所もちがひ候へ共、心と吟と同物故にて歟。

（★の箇所から記す）上句似申候、尤存候間、改申候。此段は忘却仕申候キ。右に可申上候。

まきあぐる簾に春の風さえてこぞのまゝなる嶺の白雪

詠哥大概にも、以四季哥詠恋雑哥――――、如此掟に候へば御製も不可有巨難候歟。

（★★の箇所に記す）此段は尤存候。

F 「和歌」（76059）

早春

空はまだかすみもあえず春さえてこぞのまゝなるみねのしら雪　龍山

そらは猶かすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月　後京極

是を本哥候哉。あまりそのまゝのやうにおぼえ候ままけいこのためたづね申候。ある御かたの御ふしんにて候。御返事ニ、仰尤存候。等類に可罷成候歟。然者、

まきあぐるすだれに春の風さえてこぞのまゝなる嶺の白雪

如此あらため可申候歟。

G 「龍山公五十首御詠草」（59126）

早春

捲あぐる簾に春の風さえてこぞのまゝなる嶺の白雪

H 「五十首」（77705）

早春　龍山

捲あぐる簾に春の風さえてこぞのまゝなる嶺の白雪

2 氷解

A 「龍山公五十首御詠草」（59127）

氷解

〳〵岩たゝむみぎりのいけのあさひかげところ〴〵やこほりとくらん

日影さす砌の池の岩間よりとくや氷をくだく玉水

B 「後陽成院宸筆御消息」（32962、『宸翰英華』五六九）

氷解（とく）

玉水は軒の玉水、雪の玉水、井手の玉水などゝかくご申候。たゞ玉水とばかりはいかやうの事候や。

C「前久公御詠草」（59177）

氷解

玉水は軒の玉水、井手の玉水などゝ覚悟申候。たゞ玉水とばかりはいかやうの事候や。

新古今に、玉水を手にむすびてもこゝろみんぬるゝは石のなかもたのまじ

称名院哥に、春浅き野沢の草の下もえにうへは氷のくだく玉水

D「後陽成院宸筆御消息」（32963、『宸翰英華』五七〇）

一　先度承候玉水の義、称名院哥は何と申たる義にて候哉。先輩もわろくし候へば、誤候事儘ある事にて候。をかしき事ながら、玉水を氷ばかりにて、昨今愚詠に、

とけ初る巌のつらゝたえ〴〵に苔のみどりをつたふ玉水

此分者いかゞ候はん哉。添削憑入候、是も爲稽古にて候故、度〴〵尋申候。くだく玉水とは義理得心申かね候まゝ、委曲承度候。

E「前久公御詠草」（59177）

一　先度承候玉水の義、称名院哥は何と申たる儀にて候哉。先輩もわろくし候へば、誤候事儘ある事にて候。をかしき事ながら玉水を氷ばかりにて、昨今愚詠に、

とけ初る巌のつらゝたえ〴〵に苔のみどりをつたふ玉水

此分はいかゞ候はん哉。添削憑入候。是も為稽古にて候故、度〴〵尋申候。★くだく玉水とは義理得心申かね候まゝ、

委曲承度候。

（★の箇所に記す）尤殊勝奉存候。

F 「和歌」（76059）

氷解

日影さすみぎりの池の岩間よりとくやこほりをくだく玉水　　龍山

玉水は軒の玉水、井手の玉水などゝ覚悟申候。たゞ玉水とばかりは、いかやうの事候や。

仰尤存候。まへ〳〵も如仰せんさく仕候やからども御座候つる。さりながら称名院仍覚哥に、

春あさき野ざはのくさのしたもえにうへはこほりのくだく玉水

又ことさら新古今集に

玉水をてにむすびてもこゝろみんぬるくはいしの中もたのまじ

如此御座候へば、玉水とばかりの證哥に可成申候歟。されども愚詠をあらため申候。

岩たゝむみぎりのいけの朝日影ところ〴〵やこほりとくらむ

G 「龍山公五十首御詠草」（59126）

氷解

岩たゝむ砌の池の朝日影ところ〴〵や氷とくらむ

H 「五十首」（77705）

氷解

岩たゝむみぎりの池のあさ日かげところ〴〵や氷とくらん

3 嶋霞

A 「龍山公五十首御詠草」（59127）

嶋霞

奥津風霞吹（をはらふ）とく波の上にうかび出たるあはぢ嶋山

B 「後陽成院宸筆御消息」（32962、『宸翰英華』五六九）

嶋霞

霞吹とくのところ、

春風の霞吹とくたえまよりみだれてなびく青柳のいと

三光院説に、名歌は一句も同じをき所はあしきよし申候ときゝをよび候。たゞし惠雲院などはいかゞ候つるや。

C 「前久公御詠草」（59177）

嶋霞　朝風（おきつかぜ）の霞吹とく波のうへ（まより）にうかび出たるあはぢしま山

霞吹とくのところ、春風の霞吹とくたえまよりみだれてなびく青柳のいと、三光院説ニ名哥は一句もおなじをき所はあしきよし申候と聞及候。たゞし惠雲院などはいかゞ候つるや。

称名院哥に、今朝のあさけ霞吹とく春風にみさほの松も色まさりけり

如此候へば三光院の説ふしんに存候。十代集にも、天の原霞吹とく春風に月のかつらも花のかぞする

D 「後陽成院宸筆御消息」（32963、『宸翰英華』五七〇）

一　霞吹とく

此義度々御指南祝着申候。先度女御迄申候つる事いかゞ届申候哉。制詞歌五十四五首は空に如レ形覚申候。霞吹とくを制詞にて候とは不申候つる。

春風のかすみ吹とく絶まよりみだれて靡く青柳のいと

此みだれてなびく制詞にて候。然者制詞のある哥はいづれも名哥にて候故、同者同じ置所又同じつゞけ様に用捨肝要かと申候義にて候。喩ば第四の句にぬれにぞぬれし、又五文字に秋の露や、これらのたぐひ数多御入候歟。是等皆制詞にては候はね共、同じ置所嫌申候哉。たゞ霞ふきとくとの詞者常にうた連哥にある事にて候。仍覺歌は殷富門院大輔が哥を本哥にして詠候様に分別申候。本哥に取候時は同じをき所は常の御事候哉。春風を興津風と被改候故に、心詞吟此三つかよひ候て、同様にをろかなる耳に聞え候を、為二稽古一尋申候つる。

一　取古哥詠新哥事、是は詠哥之大概の抄にて大方得心申候。源氏物語にもある義にて候。

E　「前久公御詠草」（59177）

一　霞吹とく

此義度々御指南祝着申候。先度女御迄申つる事いかゞ届申候哉。制詞哥五十四五首は空に如形覺申候。霞吹とくを制詞にて候とは不申候つる。春風のかすみ吹とく絶まよりみだれて靡く青柳のいと、此みだれてなびく、制詞にて候。然者制詞のある哥はいづれも名哥にて候故同者同し置所又同じつゞけ様に用捨肝要かと申候義にて候。喩ば第四の句にぬれにぞぬれし、又五文字に秋の露や、これのたぐひ数多御入候歟。是等皆制詞にては候はね共、同じ置所嫌申候哉。たゞ霞ふきとくとの詞は常にうた連哥にある事にて候。仍覚哥は殷富門院大輔が哥を本哥にして詠候様に分別申候。本哥に取候時は同じをき所は常の事候哉。春風を奥津風と被改候故に、心詞吟此三つかよひ候て同様ニをろかなる耳に聞之を、為稽古尋申候つる。

一　取古哥詠新哥事、是は詠哥之大概の抄にて大方得心申候。源氏物語にもある義にて候。

F　「和歌」（76059）

嶋霞

二おきつかぜせかすみふきとく波の上にうかびいでたるあはぢしま山　　龍山

一あさ風の仰御ふしんに　霞ふきとくの所

新古今春風のかすみふきとくたえまよりみだれてなびく青柳の糸

三光院説に、名哥は一句もおなじ所はあしきよし申候と及聞（ママ）候。たゞし恵雲院などはいかゞ候つるや。

称名院哥に松有春色と云題にて

けさのあさけかすみふきとく春風にみさほのまつも色まさりけり　　仍覚

如此御座候へば三光院の説ふしん（誰人申候哉）に存候。恵雲院も何とも不申聞候。其上十代集春部の内に

あまのはらかすみふきとく春風に用のかつらも花のかぞする

G　「龍山公五十首御詠草」（59126）

嶋霞

奥津かぜ霞をはらふ浪間よりうかび出たるあはぢ嶋山

H　「五十首」（77705）

嶋霞

奥津かぜかすみをはらふ浪間よりうかび出たるあはぢしま山

4 河辺梅

A 「龍山公五十首御詠草」（59127）

河辺梅

〳〵二あひのあやをる水とみつる哉たち枝の梅のうつる川ぎし

川風の岸うつなみのくづれにもねざしはなれず匂ふ梅か枝

B 「後陽成院宸筆御消息」（32962、『宸翰英華』五六九）

河辺梅

くづれと申候詞、

論語（ろんご）とくしよの時、國分崩（くにほう）と候ところ、國分（くにぶん）とばかりをしへ申候。これは天子崩（ほう）御の崩の字さけ候ゆへ候や。さるによりて、うた連哥にも、くづるゝといふ詞ようしやと聞をよび候、いかゞ。

C 「前久公御詠草」（59177）

河辺梅

くづれと申候詞、論語とくしよの時国分崩（くにほう）と候ところ国分（くにふん）とばかりをしへ申候。これは天子崩（ほう）御の崩の字さけ候故候や。さるによりて哥連歌にもくづるゝといふ詞ようしやと聞及候、いかゞ。

拾遺集七　神なびのみむろのきしやくづるらんたつたの川の水のにごれる

D 「後陽成院宸筆御消息」（32963、『宸翰英華』五七〇）

一　崩ると候詞の事

神なびの三室の岸や崩るらん龍田の川の水のにごれる

勿論此哥、集に入申候へども、公宴の哥にくづるゝとよみ候證哥承度候との義にて候。承候条々、

一　家のくづるゝ、一　壁のくづるゝ、一　垣のくづるゝ、一　岸のくづるゝ、此四つの外に常にくづれ魚梁、連哥にまゝ御入候へども、禁中にての懐紙にくづるゝと候事いまだ見当不申候歟、いかゞ。

E　「前久公御詠草」（59177）

一　崩ると候詞の事

神なびの三室の岸や崩るらん龍田の川の水のにごれる

勿論此哥集に入申候へども、公宴の哥にくづるゝとよみ候證哥承度候との義にて候。承候条々

別に可ゝ申子細、無御座候。集ニ入たる哥共は禁中ニテノ御穿鑿與相聞申候。兎角崩の字尤可有用捨事無是非候。

一　家のくづるゝ、一　壁のくづるゝ、一　垣のくづるゝ、一　岸のくづるゝ、此四つの外に常にくづれ魚梁、連哥にまゝ御入候へども、禁中にての懐紙にくづるゝと候事いまだ見当不申候歟、いかゞ。

F　「和歌」（76059）

河辺梅

川かぜのきしうつなみのくづれにもねざしはなれずにほふ梅が枝　　龍山

仰ニくづれと申候詞、論語とくしよの時、国分崩と候ところ、国分とばかりをしへ申候。これは天子崩御の崩の字さけ候。さるによりて連哥にも哥にもくづるゝといふ詞ようしやときゝをよび候、いかゞ。

尤の仰、こうがくのためとかたじけなく存候。拾遺集七に、

神なびのみむろのきしやくづるらんたつたの川の水のにごれる

是も可有用捨事候与存候。兎角、崩の字用捨あるべき事尤無余儀御事候。一圓ニ不至分別候キ。愚鈍故迷惑仕候。是も前々法楽之連歌に取沙汰候。きしのくづれなどは垣、家のくづれには相替、可為各別やうに申候つる。

それさへにて候ニ、禁中の御会などには不及是非御事候。但拾遺集は長徳比大納言公任卿撰之、或花山法皇御自撰云々。付、拾芥集ニ其趣在之。

二あひのあやをる水と見つるかな梅のしづ枝をひたす川ぎし　龍山

如此あらため申候。

G 「龍山公五十首御詠草」（59126）

河辺梅

二あひのあやをる水とみゆ（つ）る哉たち枝の梅の○（下枝をひたす）ゆつる川岸

H 「五十首」（77705）

二あひのあやをる水と見つるかな梅の下枝をひたす川岸

8遊糸

A 「龍山公五十首御詠草」（59127）

遊絲

風絶て霞のひまに幽にも軒端をちかみいとあそぶみゆ（はれわたる雲もみどりのなかぞらにのどけくそれかとばかりみゆるいとゆふ）

B 「後陽成院宸筆御消息」（32962、『宸翰英華』五六九）

遊糸（ゆうし）

此御うたてにはあぢわろく候。又みゆどまりの哥近代まれにみえ候。連哥のやうに候ゆへ候や。

C

「前久公御詠草」（59177）

遊絲

此御哥、てにはあぢわろく候。又みゆどまりの哥、近代まれにみえ候。連哥のやうに候ゆへ候や。

風たえて霞のひまにのどけくも軒ばをちかみいとあそぶみゆ。勿論、哥はあしく御座候へども、てにはは不苦候歟。みゆどまりの事、伊勢物語にも、

くれなゐに匂ふはいづらしら雪の枝もとを、にふるかともみゆ

紅に匂ふがうへの白菊はおりける人の袖かともみゆ

みゆどまり、此外にも多相見申候。

D

「後陽成院宸筆御消息」（32963、『宸翰英華』五七〇）

一　みゆどまり、むかしの哥にはいか程もみえ候。近比の歌に不見当候。

E

「前久公御詠草」（59177）

一　みゆどまり、むかしの哥にはいか程もみえ候。近比の哥に不見当候。

みゆどまり、近比の哥にも相見申候。勿論歴々旧哥に御座候。大形書付申候。

（別注）

みゆどまりの哥の事、被仰出候。まづ、古今・伊勢物語・十代集などの哥を手本に申伝候。詠哥大概にも殊可見習は古今・後撰・拾遺・伊勢物語――如此御座候へば古今・伊勢物語に在之哥之詞以下を不被用、近代之人の哥を可被用事、如何。是も詠哥大概に七八十年已来之人の哥、努々是を不可学候。但、古今集之内にもべらなり、わかなつみてん、袖ひちてなどのやうなる詞は、古今と申候ても近代は不仕候。みゆなどの詞は不及其沙汰候歟。古今の哥に

さよなかと夜はふけぬらしかりがねのきこゆるそらに月わたるみゆ

伊勢物語に在之哥、右に注之。只今不及注申候。枝もとをゝにふるかともみゆ、折りける人の袖かともみゆ伊勢物語在之。

新古今さゞなみやひらの山風うみふけばつりするあまの袖かへるみゆ

十代集

雪としもまがひもはてず卯のはなはくるれば月のかげかともみゆ

名寄勅撰に在之

あゆのかぜいたくふくらしなごのあまのつりする小舟こぎかへるみゆ

むこのうみのにはよくあらしいさりするあまのつり舟波のうへにみゆ

むこのうらのとまりなるらしいさりするあまのつり舟波間よりみゆ　人丸

朝霧にしとゞにぬれてよぶこ鳥みふねの山をなきわたるみゆ　人丸

舩出するおきつしほさゐ白妙のかしゐのわたり波たかくみゆ　家持

鳴のゐる野沢の小田をうちかへしたねまきてけりしめはへてみゆ

ゐなみのはゆきすぎぬらし天づたふひかさのうらに波たてるみゆ

草根集之中　招月

はしだてや夕日をはたす波のうへにつばさいくむれさぎとぶみゆ

みる〳〵もかすみふきとく朝風にのこれる雪の山しろくみゆ　頓阿

此外、数多相見申候歟。

愚詠ども御不審之哥は不苦候与存候も悉改申候。

御不審之条目共、未　勅撰名寄にも十代集にも月清集にも可在之候歟。其外八代集・廿一代集、未勘之。付頓阿草庵集未択之。千五百番も未択之。

F

「和歌」（76059）

遊絲

風たえてかすみのひまにのどけくも軒端をちかみいとあそぶ見ゆ　　龍山

ある御かたの仰に、此御哥てにはあぢわろく候。又みゆどまりの哥、近代まれにみえ候。連歌のやうに候ゆへ候や。

仰尤存候。愚詠くた〳〵に候て勿論之よくは御座候はず候。しかれども、てにをははくるしからず候歟。されども右哥、不相叶御気色候と存仕候之間、改なをし申候。

はれわたる雲もみどりのなかぞらにそれかとみえてなびくいとゆふ　　龍山

又みゆどまりの事、御不審候歟。伊勢物語のうたに、くれなゐに匂ふはいづらしら雪の枝もとをゝにふるかとも見ゆ。同、くれなゐにほふがうへの白菊はおりける人の袖かともみゆ。同、百とせに一とせたらぬつくもがみわれをこふらしおもかげにみゆ。

G

「龍山公五十首御詠草」（59126）

遊絲

はれわたる雲もみどりの半天にそれかとばかりみゆるいとゆふ

H

「五十首」（77705）

遊絲

はれわたる雲もみどりのなかぞらにそれとみえつゝなびくいとゆふ

10 樵路躑躅

A 「龍山公五十首御詠草」（59127）

樵路躑躅

春もはやくれなゐふかき岩つゝじ木こりの袖のかへる山みち（こゝろなき木こりをみねの／てごとにかりて）

B 「後陽成院宸筆御消息」（32962、『宸翰英華』五六九）

樵路躑躅（せうろの）

上の句、下の句のえんいかゞ。

C 「前久公御詠草」（59177）

樵路躑躅

上の句、下の句の縁いかゞ。

春もはやくれなゐふかき岩つゝじ木こりの袖のかへる山みち

上下のえんの事、春もはやくれなゐは、くるゝとうけたるえんに申候歟。縁をつよくもとめすぐし候も秀句めきて嫌申候歟。詠哥大概抄に可有御座候。

D

E なし

F 「和歌」（76059）

樵路躑躅

春もはやくれなゐふかき岩つゝじ木こりの袖のかへる山みち　龍山

仰ニ上句、下の句縁いかゞ。

はゞかりながら御尋につき愚意を申入候。上の句のえんの事、春もはやくれなゐは、春もはやくるゝといふ心のえんに申候。いはつゝじ、春三月暮春にさき申候歟。下の句えんの事、つゝじを木こりの袖におりて山みちをかへる心にもたせて申候体ばかりにて候。きこえかね可申候哉。惣別えんをつよくもとめむすぶ事も哥の先達申をくも、秀句めき候とてきらひ申候やうに相見候歟。樵路躑躅のうたもかくのごとくあらため申候。御ことばをくはへられ可被下候。

こゝろなき木こりをみねの岩つゝじ手ごとにかりてかへる山みち　龍山

G「龍山公五十首御詠草」（59126）

樵路躑躅

心なき木こりをみねの岩つゝじ手ごとにかりてかへる山道

H「五十首」（77705）

樵路躑躅

心なき木こりをみねの岩つゝじ手ごとにかりてはこぶ山道

〔（下）に続く〕

【付記】資料の閲覧・翻刻を御許可戴きました陽明文庫長名和修氏に記して深謝致します。また、本稿は平成二五年度研究経費助成ならびに平成二六年度研究補助員助成による成果の一部である。（下）は、京都女子大学大学院文学研究科研究紀要『国文論藻』14号（二〇一五年三月）に掲載予定。

（本学教授）